

「この名字、……華音ちゃんにあげるよ」

「本当？ 楽しみにしてる！」

小学生の時に交わしたちっぽけな約束を信じて待っている私は、馬鹿でしょうか？

——お願い、神様。もう少しだけ夢を見させて下さい——

——まもなく扉が閉まります。ご注意ください。

定番のアナウンスが聞こえ、階段を一気にかけ上がり、大急ぎで車内に乗りこむ。ピンポン、ピンポンと電車の閉まる音を聞きながら、呼吸を整え、近場の吊り革につかまる。「駆け込み乗車は危険ですのでおやめ下さい」というアナウンスに罪悪感にかられながら、帰路につく。これがいつも通りの日常だ。

大学生になったら、毎日がキラキラしていて、楽しいものだと思っていた。授業を受けて、部活やって、バイトやって、家に帰る。そんな日常がいつの間にかルーティンワークのようになっていく。決して楽しくないわけではないけど、何かが足りない気がする。そんな感じ。前に友達と話した時は「恋」じゃないのか？ と言われたけれども、いまいちピンと来ない。かっこいいと一般的に言われる男子学生と話しても、ドキドキしないし、ときめくこともない。

多分、きっと。私の恋心は、中学校の頃から止まったままなのだ——。

期末テストも終わり、もう少しで春休みが始まり、クラス全体が浮き足立っていた中学校一年生の三学期のあるお昼休み。

「大変、大変！」と大慌てで、幼馴染の安川蓮がクラスに飛び込んできた。その様子にただ事ではないと感じたのか、クラス中が「何？」「どうした？」等と声をかける。おそらく廊下を走って来て疲れたのか、一呼吸おいて、私にとって衝撃的な一言を告げた。

「真示、……っと、多福が他県に引越すって！」

「え？」という私の驚嘆の声は、他のクラスメイトの「え——？！」という息の合った叫び声に掻き消された。

——多福真示。彼、福ちゃんは私が小学校の時からずっと一緒のクラスメイト。いつも私にやさしくしてくれる素敵な人。そして、小学校の卒業式の時に、——私に名字をくれ

ると言ってくれた人。

その時は気恥ずかしくて、冗談だったらどうしよう、なんて思いながら春休みを過ごして。新ためて確認する勇氣もなく、次に会ったときには普通に「おはよう！ 同じクラスだよ。また宜しくね！」なんて普通に接してしまった。「そっか、宜しく」と笑顔で言ってくれたことは嬉しかったけど、寂しかった。それからずっと「ただのクラスメイト」の立ち位置を保っていた。つかず離れず、ほどよく仲良しに。楽しかったなあ、などと福ちゃんとの淡い思い出に思考を巡らせていると、ふと机に影がおちた。視線を上げると、蓮が心配そうに私を見つめながら立っていた。

「いいの？ このままで？」

クラスがざわつく中、そっとそう言った。何も話してなかったけれど、流石は幼馴染、雰囲気で分かっていたのだろう。「何が？」と、とぼけたところで、きつとすぐに論破される。蓮は頭がいいから。素直になった方が得策だろうか、と思い、「……良くない」とそつと答えると、満足そうに微笑んで「じゃあ、やるべきことは？」と言い放つ。言いたいことは分かっている。「後悔する前に行動しろ」だ。

カタン、音を立ててゆっくりと席を立ちながら、「次、自習の時間だったよね」と言い訳じみたことを言うと、「そうだよ、先生もこないよ？」とニコニコと手を振りながら言う。うん、余計な情報がありがとう。ゆっくりとクラスの扉に向かって歩く。「あ。因みに、さつき話を聞いたのは職員室だよ」とウインクしながら言う。

その言葉を聞いて、廊下に出て、職員室に向かって走った。明日は終業式。福ちゃんが教室に戻ったら、クラスの皆でお別れ会をするに違いない。そうなったら、もう二度とチャンスがない。

取りあえず。走って、走って……。やっとの思いで着いた職員室をのぞいてみたが、福ちゃんは居なかった。部室コーナーを見ても、教室にもう一度戻ってみても、福ちゃんは居なかった。

見切り発車で出てきたのがよくなかったのか、時計を見るとお昼休みは残り五分しかない。何も今無理して探さなくても、帰りに時間をもらえばいいじゃないか、と閃き、教室に戻ろうと思ったとき――。

「多福君、引越すんだって？」「はい。父の転勤で」――建物の向こう側から声が聞こえた。多福。――福ちゃんだ！ そう思い、そつと陰に隠れて様子を窺うことにした。他愛もない会話をする二人に甘い雰囲気はないが、ふと女性の先輩の目を見て悟った。

――あの先輩は福ちゃんに恋をしている。

他愛もない会話の後、予想通り先輩は「多福君が好きなの。付き合ってくれる？」とそつと言った。何と答えるか興味津々で聞いていると――

「……ありがとうございます。でも、すみません。――好きな人が居るんです」

「そっか。聞いてくれてありがとう」

その言葉を聞いてハツとした。あの言葉を言われてから早一年。お互いに何気なく過

していて。気付きたくない事実気付いてしまった。

あれ、——私勝算あるの？

もし、あの言葉が冗談だったら？

同じように困った表情で「ごめん」って言われたら？

明日まだ終業式があるのに、笑って会う自信ある？

また会える希望をすべて丸投げして、今にすべてをカケラレル？

色々と考えれば考えるほど、思考が負のスパイラルにはまってしまおう。傷つきたくない、
と思ってしまうのは、人間の防衛本能なのか。

どうしよう、——無理だ。

「あれ？ 華音ちゃん、何してるの？」

「え？」

ふと思考を現実に戻すと、先輩との話が終わったらしい福ちゃんが私の顔を覗いていた。
——嗚呼、何てタイミングの悪い。そんなことを思いながら、在り来たりの一言を吐く。

「福ちゃん、転校するんだね」

「あ……、うん。多分、高校卒業するまではこの街には来れないかな……」

高校まで。——あと五年。数字にすると恐ろしく長く感じる。下手したら二度と会えないかもしれない。——このままでいいの？ さっきまで萎んでいた熱意が再び動き出す。
意を消して、口を開く。

「「あの……ふっふ」」

無情にも二人して言葉が重なる。こんなところで仲の良さを発揮しなくてもいいのに。

若干切なさを感じながら「福ちゃん。先に言って下さい」「え？ あ、えーと、華音ちゃんからどうぞ？」なんてコントのような会話を繰り返している内に。——キンコーンカーンコーン。タイムアウトの鐘が鳴った。

「取りあえず……、戻ろうか」

「うん」

この後普通にクラスに戻って、予想通りお別れ会をし、「また逢えたらいいね」って笑い合いながら別れた。終業式でも色々な人に囲まれていて、話すチャンス逃した。勿論、蓮には小一時間叱られた。

それから福ちゃんには一度も会っていない。高校を卒業して、大学に入学してからも。今時ならまだしも、四人兄弟のわが家では一人一人に携帯電話やパソコンを持たせてもらえる余裕もなく、福ちゃんに連絡する手段はひとつもなかった。そのため、福ちゃんが今、どんな人になっていて、どんな生活を送っているかもまったく分からない。

「元気にやってるのかな……」

誰にも聞こえないだろう声でそっと呟く。——高校卒業するまではこの街には来られないかな。だったら、高校を卒業したらこの街に帰ってくるのが出来るんだ、と私は勝手に解釈して、楽しみにしていた。「待ってて」とは一言も言われてはいないけれども、色々悩んで、考えた結果、私は私の気が済むまで、また新しい恋が出来るまで、待とうと、想い続けようと決めた。もし、いつか本当に逢えたその時には——。

——駅、——駅です。

駅名のアナウンスで思考を戻すと、電車は次の駅に到着したようで、多くの人数が降り降りをしている。私はだいぶ長い間、感傷に浸っていたらしい。ふと隣を見ると茶髪に細身かつ長身の真面目そうな少年が居た。しかも綺麗な顔立ちをしている。大学生だろうか？手元を見ると「愛のC#応用編」という本を真剣に眺めている。本の表紙には薔薇のイラストと英語とは少し違った様々なアルファベットが書いてある。しかもタイトルが「愛のC#」って何なんだ。応用ってことは基礎もあるんだろうか？などと、心の中で突っ込みをし、ひとり満足をして、顔を上げると。

——パチリ

本の持ち主である隣の人と目が合ってしまった。ぱっと目をそらし、恥ずかしい気持ちと気まずさを振り絞って「すみません」と言いながら、もう一度彼を見る。すると、豆鉄砲を食らった鳩のような顔をしていた。

思わず「あ、あの、どうかしました？」と声を掛けると、「え、あ、いや」と若干歯切れの悪い返事が返ってくる。どうかしたのだろうか？ともんもんと考えていると、彼は少し考えた後にこう言った。

「……あの、失礼ですが、貴方はミズシマカノンさんですか？」

「あ、はい。——え？」

確かに、私は水島華音だ。彼の言っていることは正しい。しかし何故、彼は私を知っているのか？私の脳内友人メモリをどんなに検索してもこんな美形な友人は居ない。そもそも居たら凄い勢いで覚えているはずだし、見た瞬間に思い出すはずだ。そんなことを考えながら思案をしていると、私の邪な考えをくみ取ったかのように、紳士的な笑顔を浮かべながら彼はこう言った。

「まあ五年ぶりだから仕方ないかな。『多福』という名字に覚えはありませんか？」

「く……く？」

——多福。多福なんて珍しい名字、私の友人に一人しかいない。それにさっきまで、ずっと考えていた人なのだから。

「福ちゃん？福ちゃんだよね！」公衆の面前だったことも忘れて思いっきり大声で叫ぶ。ふんわりと微笑んで、「うん、そうだよ」と答えてくれる。ああ、その笑顔。何も変わって

ない。

福ちゃん。貴方に逢えたら、ずっと言おうと思っていた言葉があるんです。
それは——この電車を降りたときに。

END